

新潟県魚野川流域を中心とした川の文化の記録

戸門 秀雄

魚野川との出会い

谷川岳（1,977m）をはじめとした新潟・群馬県境の山々に源を発する魚野川は、越後湯沢で幾つかの支流を合わせた後、魚沼平野を貫流し、やがて越後川口で信濃川に合流します。流程は70km余り。本流にダムがなく、豊富な雪解け水に恵まれた魚野川は、国内屈指の稲作・酒造地帯を潤してきました。一大支流の破間川、近年ダムの出来た三国川に、ヤマメ、イワナの好釣り場を秘める登川や、佐梨川など数多くの支流を包蔵しています。豊富な魚種と相まって、昔から川漁が盛んな地域です。

昭和40～50年代、魚野川流域の漁場を管理する魚沼漁業協同組合（以下、魚沼漁協）には6,000名近い組合員がいました。一漁協の組合員数としては全国有数の規模になります。現在は3,000名を若干下回っていますが、今なお魚野川には豊富な魚種が生息し、これを獲るための漁法も多彩です。なかでもサケに関しては、かつて魚野川（信濃川）で獲れた初鮭一匹に、時の殿様が米七俵の褒美を与えた古い歴史があります。サケの待ち川漁、鮭魚明神、鮭頭石、サケずしのほか、イワナ当番、イワナずし、川マスのカギオロシ、アユの釣り子など、独特の漁法や習俗、文化が育まれてきました。

昭和49年1月5日、私は銀毛ヤマメを釣るために、初めてこの川を訪れました。当時の魚野川では、普通なら禁漁となり無聊なはずの冬の真只中に溪流釣りができたのです。一面の銀世界の中での銀毛ヤマメ釣りに魅了された私は、一週間後には近くのスキー場で住み込みのアルバイトを始め、一冬を魚野川に通いました。以来、今日に至るまで、私はこの川に出かけています。当初は山溪ばかりに目を向けていましたが、やがて川漁師の方たちとの出会いから、流域の魚と人の重厚な歴史を知ることになります。いつしか私は、車のトランクに愛竿を忍ばせつつ、ペンとノートを持参し、さまざまな魚の漁法や漁具、食べ方、川にまつわる伝承などを書

き留めていました。半世紀にわたり日本各地の釣り旅を続けてきた私ですが、魚野川で目にした魚と人の豊かな関係は稀有だと考えます。



早春の魚野川と八海山

『北越雪譜』の延長線上に

私は昭和27年、埼玉県入間市生まれです。高校卒業後、考古学を志しましたが、溪流魚の魅力に取り憑かれ、昭和51年、天然の溪流魚と山菜・キノコの料理を提供する店「郷土料理ともん」を入間川の畔に開店しました。釣りと食材集めで各地の溪流を訪ね歩き、職漁師の暮らし・漁法・漁具を記録してきました。

越後魚野川の流域には、その雪深さゆえに、古くから独特の文化が育まれ、守られてきました。雪はすさまじい脅威であるとともに、共生の対象でもありました。江戸期の雪国百科全書として知られる鈴木牧之著『北越雪譜』には、この流域の風俗、生活、方言から、雪の結晶、動物と人のかかわり、奇譚まで、雪国の文化の諸相が挿絵を交えて詳細に記録されており、この時代のベストセラーとなりました。

全国各地の河川から失われてしまった個性豊かな川の文化が、雪に守られた魚野川流域には、現代においても、まるごと残されていました。それを記録に残す作業は、『北越雪譜』の延長線上にあると同時に、前人未踏の領域でもありました。川漁師の仕事は、流域のさま

さまざまな生命や職種とつながり、小宇宙をなしています。それは多くの人々の生業や手仕事によって守られてきた川と人との共生関係の体系でもあります。その全体像の記録は、どこにも存在していませんでしたし、困難が予想されました。しかし、今やらねば、多くの川の文化が消えゆき、忘れられてしまう。その一心で、川の文化の記憶と記録を未来に伝えようと試みました。川は海に向かって流れるばかりではありません。川は未来に向かっても流れていると信じているからです。この川の文化の記録が、やがて訪れる川と人との共生の時代の礎になることを願っています。

活動概要

半世紀にわたり東日本各地の溪流を訪ね歩き、職漁の世界を記録してきました。なかでも新潟県の魚野川流域には、48年間にわたり通い続け、種々の魚の漁法、漁具、食べ方、伝承などをノートに書き留めてきました。拙著『川漁 越後魚野川の伝統漁と釣り』（農文協、令和3年）は、その集大成です。平成27年3月3日～令和元年9月3日、本にまとめるための取材を行ないました。現存する漁法については現場を取材し、失われた漁法については往時を知る古老の方たちから話を聞きました。スポンサーがいるわけではありませんので、すべて手弁当でしたが、大好きな川と水の旅です。苦に思ったことはありません。

現在、日本の多くの川に堰堤や取水堰、ダムが構築されていますが、川は日本列島の血管であり、血流が滞れば種々の病弊が発生します。特に川と海を往来して生きる魚種への影響は甚大です。近年はゲリラ豪雨による急激な増水や氾濫防止のために平野部の多くの川が直線的な流路に改修され、カワウや外来魚（ブラックバス、ブルーギル等）による在来魚の被害も深刻で、個性豊かな日本の川は姿を消そうとしています。

豊富な雪解け水の流れる魚野川は、水量も多く、魚種も多彩なために、^{すな}漁りに携わる人も多く存在します。特徴的な魚食文化、漁りの伝承など、“川の文化”に溢れています。しかし、その文化の担い手が一人、また一人と鬼籍に入られ、記憶と記録の継承のための時間は、もう残されていませんでした。「今やらねば、豊かな川の文化が永遠に消えてしまう」との思いから、流域の人々を訪ね、聞き書きを重ね、『川漁 越後魚野川の伝統漁と釣り』を執筆しました。

現役の川漁師は、漁りが生業であるがゆえに、すべ



拙著『川漁 越後魚野川の伝統漁と釣り』（農文協）

ての人が漁りの手の内（漁の技術や工夫）を語ってくれるとは限りません。そこで何度も足を運び、当方も漁撈を深く愛する者であることを知っていただきました。あるとき、漁師のリーダー格の方が、漁師仲間に向かって「この人は俺たちの仲間だから」と伝えてくれたときは嬉しい上に、以後の取材が円滑になりました。

本にまとめるための取材は時間との闘いでした。62名の方に取材にご協力いただきましたが、その中には本の完成を見る前に亡くなられた方もいます。本を直接お渡しできなかったことが残念でなりません。モクズガニ漁師は取材時には2名いらっしゃいましたが、1名に減ってしまいました。魚野川木造船の舟大工、片山さんへの取材は、造船所の解体前日、造船所の最後の日でした。ほかにも、そういうことがあり、ギリギリ消えゆく前のタイミングに間に合えたのは運もよかったと思っています。

魚野川流域の川の文化

魚野川の川名は、「鮭の多く獲れた川」を意味すると解釈されています。『温古の栞』第七編（温古談話會、明治23年）によると、「鮭（倭名稱に佐介、鰯俗に鮭の字を用ふ）當國第一の名産にして魚沼郡、魚野川等の稱は此鮭魚に起ると云い魚類は多き中鮭に限り國俗は單に魚又雌を女魚雄を男魚と稱す」とあります。

サケの一括採捕は、昭和52年の秋から始まりました。そのおかげで今日、魚野川には多くのサケが遡上しますが、反面、それまでの伝統的な漁法やサケ漁に

まつわる多くの習俗が姿を消しました。

魚沼市四日町の諏訪神社境内に祀られている石祠「鮭魚明神」と御神体の「鮭頭石」は、往時のサケ漁を今に伝える大切な史跡です。かつては、この場所でサケ供養と川定め（漁場決め）が行なわれていました。



鮭魚明神（魚沼市四日町、諏訪神社境内）。サケ供養を行なった



鮭頭石の前では、かつて四日町のサケ漁師が参集し、「川定め」（簀引きによる漁場割り）を行なった

また、長岡市西藏王の金峯神社では、例年11月5日の王神祭にて、年魚行事と称して信濃川で獲れたサケ（雌に限る）を捌き、鳥居の形に仕立てて神様に奉納します。王神祭は、新嘗祭に通じる収穫（獲）への感謝の祭事で、今も続いています。なお、越後の年取魚はサケのため、年越しの膳にサケはもちろんのこと、子孫繁栄を願って魚の子（イクラ）を使います。魚野川畔で乾し上げた塩引き鮭をはじめ、サケずし、マスずし、イワナずしは、川が豊饒な時代の郷土食でした。



王神祭の年魚行事（長岡市西藏王、金峯神社）。収穫（獲）への感謝のしるし



恩念切り。真魚箸（まなばし）と式包丁で鳥居の形に整えて王神に奉納



塩引き鮭。さらに乾し上げた「乾鮭」（からさけ）は『延喜式』に登場する「楚割鮭」に近いもの



サケずし（左）とイワナずし（右）。米と麴で漬けるなれずし。秋に漬け、正月に食べるご馳走

マスずしはサクラマスを使います。サケ同様に、日本海から魚野川の本支流に遡上します。拙著の表紙にも掲載させていただいた絵画「捕鱒之図」は、流量豊かな日本の川の本来の姿を伝えています。この絵は、新政府の廃藩置県（明治4年7月）を記念して描かれたと伝えられています。

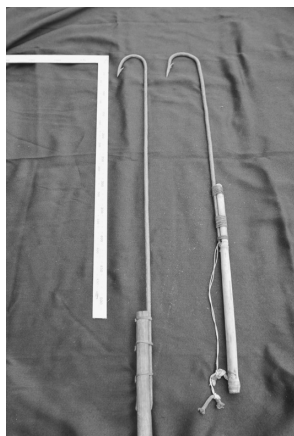


魚沼市指定文化財「大白川の捕鱒之図」。個人所蔵。廃藩置県（明治4年7月）を記念して描かれたハヨ止滝の「カギオロシ」の様子。（写真提供：魚沼市教育委員会）

マス獲りは鋭利な鉤^{かぎ}を使うため、解禁日を「カギオロシ」と呼びました。前述のサケ漁と同じで、お互いの競争を避け、参加者全員が平等に分け合う共生の精神がありました。往時、カギオロシの行なわれた破間川のハヨ止滝（ハヨはウグイのこと）は現存します。



ハヨ止滝。約150年後の現在の様子（ダムや取水堰で水量減）

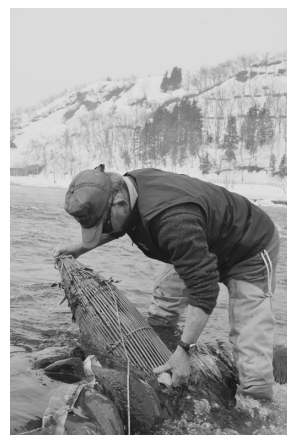


マスカギ。魚野川支流の破間川で使われた古いタイプのもの

「カジカ酒」（骨酒）は、魚野川で生まれ、今や全国区の人気です。南魚沼市浦佐の普光寺で毎年3月3日に行なわれる「浦佐毘沙門堂裸押合い祭り」の出店から広まりました。そのカジカの稚魚は、地元の小学一年生の手によって、毎年魚野川に放されます。小さな生命が未来に向かって泳ぎ始めると、幼い歓声も魚野川の青空に広がります。



カジカの「板落とし漁」。
板を踏む者、網を構える者、二人一組で行なう



かじかの「つつ漁」。
つつは籠状の漁具で釜（うけ）とも言い、製作は冬の手仕事



浦佐の裸押合い祭り（浦佐普光寺）。
『北越雪譜』の「浦佐の堂押」のこと。3月3日に行なわれる



カジカ酒の店。
さまざまなベンケイ（焼いた魚串を刺す藁製の道具）が目を引く



孵化して3ヵ月のカジカの稚魚。
親魚は数名の川漁師が産卵期の4月に特別採捕

川の文化について、限られた紙幅の中で語り尽くすことは到底できません。ご興味のある方は、ぜひ拙著をご高覧いただけましたら幸甚です。

関連する活動

私の知見について、河川漁撈の民俗考古研究の第一人者、故・小林茂氏（秩父の民俗・民具の著名な研究者で、膨大な民具・漁具を集めた国の重要有形民俗文化財“小林コレクション”でも知られる）は、「漁具を見ただけで、ここまで語れる人はいない」と評してくれました。平成16年、埼玉県入間川流域の4市1村が合同で開催した企画展「入間川再発見!」では、「入間川の漁と川釣りの世界」コーナーの展示・図録に協力しました。

平成25年の著書『職漁師伝 溪流に生きた最後の名人たち』で紹介した長野県の志賀高原漁業協同組合は、「魚を守るには山を守れ」で日本有数のイワナの漁場を保全した功績により、第48回吉川英治文化賞を受賞しました。本の内容が高く評価されて受賞に至ったため、私も吉川英治国民文化振興会から授賞式にご招待いただきました。

私は元埼玉考古学会会員で、若き日の論文に「埼玉県西南部発見の先土器時代資料」があります。高校卒業後、考古学を志した経験が、川の文化の記録にも生きたと感じています。

釣りの腕を見込まれて、ダイワ精工（現グローブライド社）のアドバイザーも務め、大物喰わせ釣り用の溪流竿「碧翠」「碧羅」を共同開発しました。

溪流釣りおよび山菜・キノコ採りにも精通している川漁の研究者として、関連するテーマの講座や講演会で講師を務めています。

現在、入間市料飲業組合理事、入間市食品環境衛生協会指導員をしております。平成21年、入間市技能功労者（和食）として表彰されました。私が料理と漁を生

業としていることは、川漁師の皆さんとの距離を近づけてくれました。

〔論文・著書〕

「埼玉県西南部発見の先土器時代資料」（『埼玉考古』10号、埼玉考古学会、1972年）

『山の魚たちの午後 溪流歳時記』（JICC 出版局〈現・宝島社〉、1985年）

『溪語り・山語り 山人たちの生活誌』（山と溪谷社、1990年）

『キノコ おいしい50 選』（恒文社、1999年）

『山菜・木の実 おいしい50 選』（恒文社、2000年）

『増補版 キノコ おいしい50選』（恒文社、2007年）

『増補版 山菜・木の実 おいしい50選』（恒文社、2007年）

『職漁師伝 溪流に生きた最後の名人たち』（農文協、2013年）

『川漁 越後魚野川の伝統漁と釣り』（農文協、2021年）

活動の成果

地元の新聞（新潟日報、越南タイムズ）や読売新聞新潟版などが本書を取り上げてくれたため、流域の自治体・漁協・学校・図書館などに本書が配備され、川の文化の継承に活用されているほか、多くの漁師や住民、ダムを管理する電力会社の方たちまで、本書を購入してくれました。南魚沼市の六日町小学校の一年生によるカジカの稚魚放流の様子も、本書で紹介しています。地元自治体より、本書に基づく講演も依頼されており、コロナ禍の収束を見て実施される予定です。



8年前から続く地元六日町小学校の一年生によるカジカの稚魚放流。
子どもたちはこの日を楽しみにしている

著名な河川工学者で新潟大学名誉教授の大熊孝先生（令和2年度、毎日出版文化賞、土木学会功績賞&出

版文化賞をトリプル受賞された)からは、「地球温暖化が進み、自然のあり方は大きく変わる中、再び自然との共生が求められる時代になる。その時、本書で示された川との共生関係がお手本になるに違いない」とご高評を賜りました(新潟日報書評)。

今後の活動

これからも魚野川流域の人々と川について語り合い、著書や講演、地元漁業協同組合の教育活動への参加などを通じて、川の魅力を伝え続けたいです。

私の地元、埼玉県の入間川流域でも、小学校の授業で川の魅力を伝えています。

魚野川、並びに川に対する私の気持ちは不変です。

謝辞

本書の作成には、川漁師の皆様をはじめ、多くの方にお世話になりました。心より感謝を申し上げます。なかでも魚沼漁業協同組合の前参事(現副組合長)の鈴木政幸さん、同じく元参事の小幡典男さんには、多くの助言を賜わり、また種々の計らいをいただきました。お二人をはじめ、お世話になった当漁協職員の皆様に、心よりお礼を申し上げる次第です。また、多くの方から貴重な資料や写真のご提供並びに数多くの助言を賜りました。ここにお名前を記して謝意を表する所存です。取材時にはお元気でいられた方の中には、その後、病いのために帰らぬ人となった方もおられます。心より感謝を申し上げ、哀悼の意を表すと共に、直接本書をお渡し出来なかったことをお詫びする次第です。

協力者一覧 *敬称略、五十音順

〔機関〕

足立区立郷土博物館

五十沢鮭鱒部会

池田記念美術館

入間漁業協同組合

魚沼漁業協同組合

魚沼市教育委員会

金峯神社

グローブライド株式会社(ダイワ)

合資会社越南プリンティング

中魚沼漁業協同組合

新潟県民俗学会

南魚沼市社会福祉協議会

〔個人〕

(長岡市) 片山義弘、鈴木政幸、関正弘、桃生鎮雄

(魚沼市) 荒井俊男、井口肇、磯部みどり、磯部義一、

伊藤昭五、大竹春夫、小幡典男、木村正幸、桑原務、小池信通、佐藤あさの、佐藤おまさ、佐藤武、佐藤幸則、神保幸雄、住安彰裕、住安正信、高野栄子、高野亮太、高橋正賀、田辺辰彦、仲林専治、仲林チヨ子、仲丸幸、星好夫、目黒恒夫、米山栄治、米山信一、米山美枝子

(南魚沼市) 阿部方英、稲津東洋明、磯部文雄、上村忠明、大津政幸、大津政好、貝瀬恒夫、貝瀬義夫、片桐一男、桑原明芳、小泉栄子、小泉壮治、清水行雄、高橋良一、南雲国弘、並木政友、半沢唯夫、星野越郎、丸山一美、目黒誠、目黒正晴、山田武雄、山本紘美、渡辺幸

(十日町市) 小林彰

(東京都) 相吉孝顕、荻原ちとせ

(埼玉県) 小島文明、吉田俊彦

戸門 秀雄